



石川淳

靈藥十二神丹

筑摩書房

靈藥十二神丹

著者石川淳

昭和三十四年五月十日印刷

昭和三十四年五月十五日發行

發行者東京都千代田區神田小川町二ノ八古田晁

印刷所東京都青梅市根ヶ布三八五株式會社精興社

製本所東京都千代田區神田猿樂町一矢島製本所

發行所東京都千代田區神田小川町二ノ八筑摩書房

電話東京二九局⁽²⁹⁾七六五一番
振替東京一六五七六八

頒價五百八拾圓

靈藥十二神丹目錄

近松

三

おとし
ばなし
業平

三

鱈

九

今はむかし

全

遊船

二七

蜃氣樓

一三

靈藥十二神丹

一七

かくしごと

三

怪異石佛供養

三七

靈藥十二神丹

近松

——野澤喜左衛門節附淨瑠璃放送臺本——

昭和三十一年八月作

寶永二年乙酉きのととり、ひさしく住みなれた京を引きはらつて、いよいよ大阪に乗り出して來た近松門左衛門、ときに五十三歳、その十一月の顔見世は道頓堀竹本座、操芝居の、初日をあすに控へて、外はしぐれの空模様ながら、移つたばかりの疊あたらしく、煎茶のけむりぬくぬくとおちついて、市中ひとときのしづかさ、庭に松杉は植ゑなくても、落ちこんだ渡世の道にでんと根をおろしたけはひと見え

た。
そこに、

「座元がおいでなされました。」

とりつぎの聲を待つまでもなく、へだてぬ仲の、つい奥に通る竹田出雲、けふ

は十五ばかりの男の子をつれてゐる。

「御來客でしたか。」

「え。」

「いや、今こちらの門かどぐちで、入れちがへに、ついぞ見なれぬおひとが出て行かれたが……」

「あれはわたしも初對面の仁ぢや。雲州侯の茶道なにがしと名のつて、ふいに來たが、ちかごろ作者の氏神ときこえの高い、この近松の顔を見れば、それだけで十分と申されてな、はつは、長居はせずに、器用にかへつてくれたよ。」

「それは奇特な御見物。」

「芝居渡世、ときにはかういふ亡者の相手もさせられる。しかし、小屋の看板にも、辻辻の札にも、狂言作者近松とれいれいしく書きしるして、所詮は芝居事で果てると覺悟をきめた上は、とかく身すぎが大事、ひとにかげ口をきかれようと、ずるぶん名を賣つてみせるまでぢや。」

「なに、かげ口も愛嬌。今さらもとめて名をお賣りなされずとも、平安堂の師匠の貫祿はもはや三ヶ津に押しも押されぬせぬことぢや。げんに、それ、をととし

の大あたりの御作、竹本座のためには救ひの綱の世話淨瑠璃、曾根崎心中の評判といへば……」

をととし、元祿十六年、北の新地のあそびめ初がなじみ客の徳兵衛と、これはほんものの心中をしたのは四月であつたが、その一件をつい五月に淨瑠璃に仕立てたのは近松の筆のはたらき、心中物のはじまりとあつて、のめりかけた竹本座も息をふきかへす大入、竹本義太夫の節にさそはれ、辰松八郎兵衛の操に引かれて、死んでみせるといふ藝はさむらひばかりか、町人にもできる手本はこれと、心中ははやる、歌はなほはやる、歌のながれは今に絶えず、まさに出雲のいふごとく、

「市中の老弱、道を行くにも節をまねて、文句をくちづさまぬものはなく、とりわけ、かの道行のくだりの、この世のなごり、夜もなごり、死に行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一あしづつに消えて行く……」

「そのあとの……」

「夢の夢こそあはれなれ。」

「それよ。その文句は伊勢の涼菟の入智慧ぢやといつて、近松といふ作者は何に

つけてもひとのものを取るやつ、おもへばあの狂言、この狂言の筋もなにやらで見た、なにやらに似たと、うはさがあるさうな。」

「左様なことは……」

「いや、ありもしよう。およそ芝居狂言といふもの、これを作るにあたつて取るべきものを取らずにおく法があらうか。能狂言、物語の草紙なんぞよりはじめて、内典外典に至るまで、遠いと近いとを問はず、取れるかぎりは取つて食はう。世の掟、ならはしとても、この作者の綱からはまぬがれぬ。今の世の掟ならはしにして、ひとを笑はせるもの泣かせるものがあれば、これを舞臺に借りて来て、見物を泣かせもし、笑はせもするまでのことよ。しかし、わたしはただ取りつばなしにはせぬて。蜂が花を吸ふやうに、これを蜜にして吐いてみせる。取られたやつはありがたくおもふがよい。たとへば、心中のことでいへば、わたしの書いた淨瑠璃の心中は、ほんものの心中よりも、ずんとうつくしく仕立てたぞ。さればこそ、生きた男女が見様見真似にこれをしたつて、二つなきいのちを捨てるのぢや。男も殺す、女も殺す。いや、男は助けても、女は助けぬ。戀に死ぬる女ほどうつくしいものは、この世にまたとあらうか。曾根崎心中の末段にも、未來成佛

うたがひなき戀の手本となりにけり、とはしるしておいた。この近松は狂言の筋も取る、歌の文句も取る、女のいのちも取る、名も取る、實も取る。さう、出雲どの、ずるぶん金銀も取りたいものぢやて。」

「氣に入つた御一言。座元として、たしかにうけたまはつておきませう。」

そもそも竹本座といへば、竹本義太夫のつくるところ、座元はすなはち義太夫よりおこつたが、このひと受領して筑後掾、藝道こそ無双の名譽ながら、うまれは天王寺村の五郎兵衛、宗旨は門徒といふ堅物のお百姓のこととて、世わたりの才覺はもちあはさず、興行はいつもさんさんの不首尾、名は高くても十露盤は三八の十八とへこむばかり、座の成行おぼつかなく見えたをりに、たまたま曾根崎心中のおもひがけぬ大あたりに依つて、借金の穴をきれいに埋めたうへは、さらになにをか望まうと、義太夫、見切よく、引退とところをきめた。ときに、竹田出雲、これを惜しんで、めんだうな座元はみづから買つて出て、義太夫は藝一本、今までどほりまづは舞臺に引きとどめ、もう一本の大黒柱には座附作者として近松を京からむかへ、おのれは頭取の、かならずあたると見きはめた采配、道頓堀にヤグラをあげて、運は天にあり、ふところには小判といふものをずつしり呑ん

だ太つ腹を押し出した。

近松はうなづいて、

「なるほど、あなたの才覚ならば、淨瑠璃の文句の『三六の十八九なるかほよ花』の上に出て、三八の二十七とも三十二とも、十露盤の花が咲かせさうぢや。」

「出雲の藝は十露盤だけと、お見さげ下さるな。あすは初日の、このたびの御作は用明天皇職人鑑。心中物とはがらりと世界が變つて、大時代の御趣向、善悪入りみだれて、派手な模様もあり、こまかい味もあり、さすが御苦心のほどおもしろく拜見いたしました。これを舞臺に生かすには、人形のはたらきもさることながら、こちらにいささか工夫があつて、カラクリといふ手妻を使つてごらんに入ませう。御作と、太夫と、三味線と、人形と、おこがましいが竹田のカラクリ。大阪三郷の見物は竹本座のヤグラの下にあつてみせます。」

聞いてゐるのか、ゐないのか、近松、たばこのけむりを輪にふいてゐるが、やがてしづかにきせるを置いて、

「わたしも若いころは京の宇治嘉太夫のために淨瑠璃を書き、また爰元では都萬太夫座の坂田藤十郎のためには、ついちかごろまでかずかずの歌舞伎狂言を書い

て来たが、今また義太夫のために筆をとることになつたのは、何の因縁に依るものか。おもへば、むかしの淨瑠璃といふものは、今の祭文同然にて、花も實もなきものであつた。まあわたしなんぞが出て以後、この道は面目をあらためて、文章も一段と格があがつたやうぢや。今日の竹本座の立直りを見れば、作者の仕事も張合があるといふもの。いや、かう申すのは、やつぱり竹田のカラクリに引つかつたか。」

「とんだ御挨拶。」

出雲は笑つた口もとをひきしめて、

「ときに、師匠。さういふおはなしが出たのをしほに、念のために一つおうかがひしておきたい。今までこの大阪での師匠の評判といへば、淨瑠璃はともかく、何と申しても坂田藤十郎のための歌舞伎狂言でしたな。近松といへば藤十郎。藤十郎といへば近松。それほどの御作者を、御縁あつて、竹本座の操芝居の座附におむかへはいたしたが、さて、師匠、今後も操芝居をおつづけなされるか。歌舞伎もまたお書きなされるか。これは座中ばかりでなく、御見物のいづれもが氣にかかることでせうて。」